

# 神話における征討者と統治者の映像

関 丙 勳\*

(e-mail: mbh0301@dju.kr)

---

## 目 次

---

- 一、はじめに
  - 二、征討に遣わされる者
  - 三、統治権を委任される者
  - 四、天孫に娶られる者
  - 五、おわりにかえて
- 

## 一、はじめに

高天原から葦原中国の征討を命じられた者が次々と派遣され、国譲りを経て、邇邇芸命が降臨するまでの内容には、統治者を選ぶ過程に特色が見られ、征討の過程にも独特な物語が形成されていることがわかる。天照大御神と高御産巢日神によって、はじめに葦原中国統治を命じられたのは天之忍穂耳命だが、降臨するのは邇邇芸命である。また、葦原中国の平定は三人目の建御雷神によって果たされるが、その前に派遣される天若日子の話は、神の死する場面と葬儀に関連した興味深い物語を成している。

天之忍穂耳命は二度に互って葦原中国への降臨を拒んでおり、天若日子は反逆の疑いで処刑される身となるのだが、そこには至上神の高御産巢日神が深く関わっていることがわかる。ことに、天若日子が死を招く経緯と葬儀の様子は、異彩を放っており、神話は天若日子に「神」や「命」の呼称さえ付与していないことが確認される。

本稿では、邇邇芸命が降臨する前後の記事を中心に、統治権を委任される者と、平

---

\* 大田大 学校 日語日文学科 副教授 日本古典文学専攻

定に遣わされる者の出自などを含め、平定と降臨の様相について検討を加えていきたい。邇邇芸命が降臨する前から高天原では葦原中国の統治をめぐる議論が繰り広げられており、征討者の派遣と平定の過程における出来事など、他では見られない特色が見受けられる。

比較研究の立場から、随所に韓国の神話を用いて比較検討したことを予め断っておきたい。

## 二、征討に遣わされる者

建御雷神による征討で大国主神から国を譲ってもらい、天照大御神と高御産巢日神は天之忍穗耳命に葦原中国を治めることを命じるが、天之忍穗耳命は自分の代わりに、生まれたばかりの子を降すようにと進言する。そして進言が受け入れられ、邇邇芸命が降ることになる。

ところで、邇邇芸命の降臨の前に高天原の神々によって征討に遣わされた神たちの地上における話は独特な雰囲気を出している。益田勝実は、三度にわたって神を送り、交渉に当たったことを、類例の少ないこととし、よほど強烈な、空想をそそるような原歴史体験が底に横たわっているとする<sup>1)</sup>。

初めに葦原中国の征討に遣わされた天菩比神は、大国主神に媚びついて、三年が経っても復命しなかったとあるが、その過程についての具体的な説明はない<sup>2)</sup>。天菩比神の次いで征討に派遣される天若日子も天菩比神同様、復命して来ず、しかも大国主神の娘の下照比売と結婚までする。下照比売と結婚して八年が過ぎたある日、天若日子は不幸にも自分が射た矢に中って死ぬのだが、結婚から葬式に至る内容を概観すると、死を招いた原因と葬式の様子が赤裸々と描き出されている。『古事記』は、天若日子が大国主神の娘の下照比売を娶り、八年になるまで復命しない理由を、

其の国を獲むと慮りて<sup>3)</sup> (p.115)

1) 益田勝実(1993)『火山列島の思想』「魔王伝説-日本的権力の一元流-」筑摩書房、p.85

2) この「三年」というのは、神話や物語文学のなかで、派遣や罪などで本拠を離れた者が帰還する期限として用いられていることが多く、火遠理神が海神の国から帰ってくるのも三年で、『竹取物語』でかぐや姫から難題を出され、京を離れた貴公子たちが戻ってくるのも大抵三年となっている。また『源氏物語』で、光源氏が須磨の流謫から返り咲くのも三年後である。そして、平安時代の結婚制度において、婚姻関係にある男が三年間女の家を訪れなければ、婚姻関係が解消されてしまうことも、三年という期間が持つ特殊性の現れといえよう。三年が過ぎてしまうと帰れないという暗黙の契約があったのであろうか。

3) 荻原浅男校注・訳(1973)『古事記』「日本古典文学全集」小学館

と記している。すなわち、本分を忘れ、葦原中国を手にしようとしたのである。だが、それが原因で、虚しくも天若日子は自分が射た矢に中って死んでしまう。

死ぬ前の様子を見ると、高天原では復命しない理由を尋ねさせるために鳴女という名の雉を遣わす。本来、鳴女の雉といえは、死者の魂を呼び戻すために号泣慟哭する役目を持つもので、天若日子が死に、親が高天原から降りてきて喪屋を作り、葬送の儀礼を行うときにも哭女として登場している。つまり、招魂の儀式と関係のある雉を使いとして送っていることは、天若日子の死の伏線とみてよからう。この鳴女が降りてきて天若日子の住む家の門の所にある桂の木の上にとまって、天つ神の仰せを伝えると、天若日子側の天探女がこれを聞き、鳴く声が不吉だから矢で射殺すよにと天若日子に進言する。天若日子の射た矢は雉の胸を貫いて天上にまで届くのだが、高木神(高御産巢日神)がこれを手にし、下界へと投げ返す。そのとき高木神は次のような呪いをかけている。

或いは天若日子、命を誤たず、悪しき神を射つる矢の至りしならば、天若日子に中らざれ。或いは耶き心有らば、天若日子此の矢にまがれ。(pp.116～117)

弓矢は「荒振る神等を言趣け和せ」という勅を下すときに下賜したもので、それを使って下界を乗っ取らせようとしたのではない。結局、征討のために持たせた矢は、反逆の心を抱いた天若日子の胸を突き刺してしまうのである。天若日子自ら射た矢とはいえ、実は天上に届いたものを高御産巢日神が取り、投げ返して中ったのだから、やはり懲罰の意味がある。懲罰を至上神の高木神が高天原から直接行なっているところに特徴があり、反逆に対する結末の冷酷さを強調するものと理解される。

繰り返すが、弓矢は葦原中国を服従させるために与えたもので、後に邇邇芸命が降臨するとき携える三種の神宝の剣と鏡と曲玉とは性格が異なる。つまり、弓矢では権力の掌握はできないというメッセージが秘められているのかもしれない。三人目の征討者として派遣され、大国主神の子の言代主神と建御名方神を服従させ、大国主神から国譲りをしてもらい建御雷神には剣を与えている。征伐の任が課せられているため、剣が与えられているのである。征討であれ統治であれ、役目を定める権利は高御産巢日神こと高木神と天照大御神とに限られ、征討を命じられた者が統治権を横取りしようとする謀反になる。

さて、天若日子も建御雷神も、征討のために遣わされるのに、なぜ、一方には弓を、また一方には剣を与えているのだろうか。

日本の神話では、須佐之男命が出雲に降り、八俣大蛇を退治したり、建御雷神が大国主神の子らを平定したり、また『古事記』中巻の景行記で、倭建命が西国と東国の征討にあたって、熊曾建兄弟や出雲建、そして相武国の国造などを打ち殺したりする際、剣を用いている。つまり、剣は、服従しない相手を征伐するのに最も相応しい、積極的に強力な実力行使の時に用いる武器として描き出されているのである。

それに照らし合わせると、やはり征討者の天若日子に劍ではなく、弓を持たせた記事は、強力な征伐の様子を最初から意図していなかったからではなかろうか。三人目となる建御雷神に平定の役割を担わせたかったためであろう。あるいは、歴史の上で、平定に遣わされた者の謀反があり、征討に失敗したことを語らなければならないので、劍の代わりに弓を登場させたのかもしれない。神話では、派遣される者が携えた武器にも征討の虚実が投影されているのである。

韓国の朱蒙神話をみると、もっぱら弓がキーワードになっており、神力を示す霊具になっている。ただ、朱蒙の弓は相手を処断するための武器というより、朱蒙の神性を強調するためのものとしてのイメージが強い。沸流水辺に国を建てて高句麗と名付けた朱蒙は、沸流水の上流から野菜の葉が流れてくるのを見て、人が住んでいることに気付き、狩をしながらかつていくと、沸流国に到る。ここはあたかも、須佐之男命が高天原から出雲国に追放され、肥の河に降ったとき、河上から箸が流れてきて、上流に人が住んでいることを知り、訪ねていく場面に似る。訪ねていった朱蒙とその国の王との間で、弓による対決が行われる。だが、朱蒙は征伐の形ではなく、力比べのような形で相手を屈服させている。その様子がつぎのように記されている。

王見沸流水中有菜葉逐流下、知有人在上流者、因以獵往尋、至沸流国、其国王松讓出見曰、寡人僻在海隅、未嘗得見君子、今日邂逅相遇、不亦幸乎、然不識吾子自何而來、答曰、我是天帝子、來都於某所、松讓曰、我累世為王、地小不足容兩主、君立都日淺、為我附庸可乎、王忿其言、因与之鬪、亦相射以校芸、松讓不能抗。二年、夏六月、松讓以国來降、以其地為多勿都、封松讓為主、麗語謂復旧土為多勿、故以名焉<sup>4)</sup>。

国王という松讓が朱蒙に向かって、自分の国の附庸になることを提案するが、それを拒んだため、二人は弓による技を競い合うことになる。それがきっかけとなって、ついに松讓は国をあげて降伏してくるのである。つまり、相手を平らげる際も、弓で相手を射殺すのではなく、弓による賭け事をして国譲りをしてもらう展開である。天若日子の弓と違って、平定に効果的に使われるが、劍のような征伐のイメージはない。

ところで、天若日子には「神」や「命」の呼称を与えていないことが見て取れる。そこにも、謀反を図った者の末路が暗示されている。『日本書紀』では、天稚彦とだけ名付けられていて、「彦」は日子と同じもので、普通、男子の美称で用いられるが、やはり神や命とは異なる。天菩比神も天若日子と同じく、高天原の天照大御神や高御産巢日神などの神勅を放棄し、皆の期待を裏切って、大国主神に媚びて復命しなかったが、「神」の名はそのまま保っている。『書紀』でも天穗日尊となっている。また、須佐之男命も乱行

4) 李丙燾校勘(1977)『原文三国史記』卷十三、高句麗本紀 第一、乙酉文化社、pp.130~131

のため、高天原から追放されるが、命という名は維持している。それに比べると、天若日子の謀反の企ては、やはり赦されないものだったのであろう。神話における「神・命」の呼称に関しては、原田敏明<sup>5)</sup>や立花文子などの研究がある<sup>6)</sup>。

天若日子の妻である下照比売の系譜をみると、母親は多紀理毘売命で、天照大御神と須佐之男命が天の安河を中に挟んで誓約をするとき、天照大御神が須佐之男命の剣を嚙んで吐き出した息から生じた神である。言い換えれば、下照比売は大国主神と多紀理毘売命の次女に当たり、須佐之男命の孫でもある。また、天照大御神との繋がりも確かにある。すなわち、天若日子は、地上においてこの上ない血統を基盤に王座を占めようとしたものと考えられる。しかし、彼は高天原の平定者としての役目を忘却し、空しくも邇邇芸命の外祖父に当たる高木神によって処刑されたようなものである。それを自分の射た矢に中って死ぬという、一種の「自殺」のような形に仕立てているのである。

天若日子が高木神の返し矢によって死んでから、親たちが高天原から降ってきて、八日八夜の間、死者の招魂のために、儀式を行う様子が詳細に描き出されている。それはまるで、人間の死を想像させている。

天若日子の妻、下照比売の哭く声、風に与響きて天に到りき。是に天在天若日子の父、天津国玉神及其の妻子聞きて、降り来て哭き悲しみて、乃ち其処に喪屋を作りて、河雁をきざり持と為、鷺を掃持と為、翠鳥を御食人と為、雀を確女と為、雉を哭女と為、如此行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びき。(p.117)

高天原から親族が降り来て喪屋を作り、再生の儀式を執り行うことが可能なのは、やはり大国主神の娘を妻に持った天若日子の身内だからであろう。ところで、この儀式の形態は、高天原で天照大御神が須佐男命の乱行のために天の石屋に籠もったとき、常世の長鳴鳥を集めて鳴かし、鏡や勾玉を作らせ、また、御幣を持たせたり桶を鳴らしたりする場面を想起させる。

高御産巢日神の子、思金神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集めて鳴かしめて、(中略) 天の石屋戸にうけを伏せて踏みとどろこし、(後略) (pp.81～82)

つまり、若干の違いは認められるが、天の石屋戸の前での行いは招魂の儀式を思わせるものがある。天若日子のところに鏡を作らせたりする内容は見当たらないが、引用文からは蘇生を祈願する儀式が八日八夜に互って行われているのである。だが、蘇ることはない。

5) 「神」と「命」の呼称について原田敏明は、「出雲の神々については『かみ』という名を用いており、大和の神々については『みこと』と書き表している」と整理している。(原田敏明(1967)「古代宗教論」『岩波講座 日本歴史 古代2』所収、岩波書店、pp.296～297)

6) 立花文子(1973)「古事記上巻における『命』の意義」『古典論潮』創刊号、さわらびの会、pp.30～38

なぜなら、重大な罪を犯し、その罪は高天原の主要神たちに赦されなかったからであろう。たとえば、大国主神が八十神たちによって殺された時、母親の刺国若比売が高天原に上り、神産巢日神に哀願すると、生かされるのである。だが、天若日子は高天原生まれの神なのに命を救われることは無い。すなわち、統治権を横取りしようとした罪は決して赦されないという暗示がかけられているのであろう。

さて、詳細は省くが、天若日子の葬式に因んだもう一つの物語が存在する。天若日子と顔形が似た下照比売の兄が登場し、自分を汚らわしい神に見立てたと怒り、喪屋で阿修羅のごとく荒れ狂う場面がある。

此の時、阿遲志貴高日子根神到りて、天若日子の喪を弔ひたまふ時、天より降り到れる天若日子の父、亦其の妻、皆哭きて云はく、「我が子は死なずてありけり」「我が君は死なずてましけり」といひて、手足に取り懸かりて、哭き悲しみき。その過てる所以は、この二柱の神の容姿いと能く似れり。かれここを以ちて過てるなり。ここに阿遲志貴高日子根の神、いたく怒りてはく、「我が愛しき友なれこそ弔ひ来つらくのみ。何ぞは吾を、穢き死人に比ふる」といひて、御佩の十掬の劍を抜きて、その喪屋を切り伏せ、足もちて蹶ち離ち遣りき。(p.118)

天若日子と親しい友だちだったので弔いに来たという、下照比売の兄の阿遲志貴高日子根神は、自分を穢い死人に間違えたことに憤慨し、葬式場で劍を振り回しているのである。ここでは、いままでぼやかされていた死という事象に現実感を持たせており、死は穢れたもので、絶対に更生はないというメッセージを含んでいるように思われる。すなわち、神でもなく、命でもない天若日子は人間的な死を招かれているのである。また、喪屋を散々に壊してしまう横暴な地上の神の様子は、平定せざるを得ない強い名分を引き立てる素材となるのである。しかも、このような乱暴な人間に顔や姿がたいへん似ていたと書くところからも、天若日子への軽蔑の念を読み取ることができる。

### 三、統治権を委任される者

ここでは、高天原において、葦原中国を治める神を定めるまでの過程を取り上げ、その有り様を追究してみたい。最初、高天原では天照大御神が、葦原中国は自分の第一子の正勝吾勝々速日天之忍穗耳命が治める国とし、大国主神系の存在を無視して統治を委任する。周知のように、伊耶那伎が黄泉国から帰ってきて禊ぎをするとき、三貴子が生まれ、各々の国を分治させるが、伊耶那伎と伊耶那美、二人の国生みによって生成された葦原中国の統治権は誰にも委ねていない。それは結局、このような過程と結果をつくるためのものだったのであろうか。天照大御神が第一子に統治を委任するのである。

第一子を地上に送るということは、韓国の檀君神話における、天帝積の桓因が庶子の桓雄に地上の統治を命ずる話と大いに異なる。「庶子」には、「①庶出の子、正妻でない女から生まれた子。妾腹の子。②嫡子以外の実子。あととり以外の子の総称。③年齢にいていない子。若年の子。」などの辞典的意味があるが、「庶子の桓雄」は、①か②に該当するものと考えられる。実際、神話において、親元を離れた人によって建てられる新しい国は嫡子以外の者の手による場合が多い。すなわち、王権はやはり子供の中でも嫡統の長子に継承されることが一般的であるため、長子の降臨はあり得ないことと推されるのである。そのため、檀君神話での桓雄は地上を欲しがるように、下向を自ら望んで天帝積の桓因に承諾を得て地上へと下るのである。

しかし『古事記』では、建御雷神によって葦原中国が征討され、統治者を降臨させようとするとき、天之忍穗耳命を「太子」と言いながらも地上の統治を命令する。

爾に天照大御神・高木神の命以ちて、太子正勝吾勝々速日天忍穗耳命に詔りたまはく、(p.126)

下線部の「太子」は「ひつぎのみこ<sup>7)</sup>」とよむ。言葉からすれば、天照大御神に継いで高天原の支配者になるべき存在のようだが、葦原中国へ送られようとしているのである。天照大御神が再生する不滅の神である前提があるためなのか、第一子を送るような運びになっている。

ところが、天照大御神が天之忍穗耳命に葦原中国を統治することを命じて送ると、天之忍穗耳命は降臨の途中、下界が酷く騒がしい様子<sup>8)</sup>であることに気づき、高天原に戻ってくる。それが原因で、降臨の前に征討者が派遣されることになるが、葦原中国が平定されると、天之忍穗耳命はその間に生れた自分の子の邇邇芸命に葦原中国の統治権を譲るのである。権力の継承の常識を裏返す事態は本人自らが招くような叙述となっている。降臨の途中帰ってくる天之忍穗耳命に対する神々の難詰は見られないが、葦原中国の騒ぎぐらいで、委ねられた統治権を諦めるのは、勇者には程遠いで様子である<sup>9)</sup>。

7) 日嗣の御子

8) 「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国は、いたくさやぎて有りなり」

9) 天照大御神の第一子の天之忍穗耳命の様子からは、『日本書紀』景行紀の記事を思わせるものがある。天皇の命令で政府に叛いた熊襲征伐に遣わされた日本武尊が川上泉帥を平らげて戻ってくると、天皇は東国の蝦夷の征討の必然性を語り、そこで日本武尊は征討に当たる者として兄の大碓皇子を推薦する。だが、それを聞いた大碓皇子は熊襲征伐に遣わされることを恐れ、逃げ隠れる。「愕然ちて、草の中に逃隠れぬ。則ち使者を遣して召し来しむ。爰に天皇責めて曰はく、「汝が欲せざらむを、豈強に遣さむや。何ぞ未だ賊に対はずして、子に懼ること甚しき」とのたまふ。(坂本太郎ほか校注『日本書紀』(二)、巻七、岩波文庫、1994、p.90)」大碓皇子は『日本書紀』では景行天皇の第一子で、後に日本武尊と呼ばれた小碓皇子とは双子として生まれたとある。この話は『古事記』からすると中巻に位置するもので、いわゆる神代神話ではないが、説話性が濃厚で、最も文芸性の高い内容になっている。六国史の第一史の『日本書紀』の方は『古事記』に比べると説話性が薄い、やはり長子が主人公ではなく、次子が大活躍している点で、神代神話とあまり変わりはない。

その後、高天原では天の安河の河原に八百万の神が集い、対策を考え、葦原中国を統治する者を降臨させる前に、「道速振る荒振る国つ神等」を平らげるための征伐者を遣わすことになる。その初めが天菩比神で、天照大御神の第二子に当たる。第一子の天之忍穗耳命と同じく、須佐之男命とのうけいの過程で生まれた神で、須佐之男命が天照大御神の「右の御みづらに纏かせる珠」を受けもらい、嘔みに嘔んで吐き出した息から生じた神である<sup>10)</sup>。すなわち、記述からみれば、性交渉によって生まれた神でもなければ、天照大御神の体から生まれた神でもない。しかし、厳密に言えば、二人とも天照大御神だけでなく、須佐之男命の子ととれなくもない。そのようなことから、須佐之男命の出雲の八俣大蛇退治から始まる葦原中国の経営の系譜に彼らに加わっても不思議ではないように思われる。実際、天菩比神は出雲国造の始祖に当たるもので、征討に派遣されると大国主神に媚びつくのはその伏線と解されている<sup>11)</sup>。天照大御神の第一子は統治権を放棄し、第二子の天菩比神は征伐に遣わされるが、大国主神に諂って、天降りしてから三年に至るまで復命しなかったとある<sup>12)</sup>。

ここで注目される所は、第二子には征討の役目が負荷される点で、長子との役割が明確に区別されていることがわかる。つまり、普通、謀反を起こして体制を転覆しない限り、長子に権力が承継されることが常識だったわけであろう。『古事記』中巻の景行記に、天皇によって、「朝廷に服従しない者、荒れすさぶ神」の征伐に遣わされる倭建命の話からも同じことがいえる。しかし、神話の主人公になる存在は、むしろこのような常識とは裏腹の場合が多い。次子以下の者に流離したり派遣されたりする用例が多く、特に韓国の書物では本拠を離れた長子以外の者は、よその地で支配者となる構造を呈していることが多い。檀君神話での桓雄や高句麗建国神話の朱蒙や百済の始祖の温祚などがそれに当てはまる。流離した者が本拠に戻ってきて王座を占める日本の神話とは構造が異なるが、葦原中国の征討に遣わされた第二子の天菩比神や、それに次いで征討者として派遣される天若比子は復命せず、派遣された地に定着しようとする点で韓国の神話に似る。

さて、天孫として降臨する邇邇芸命は天照大御神の第一子の天之忍穗耳命の子である。元来は建御雷神によって葦原中国が征討され、大国主神が国譲りをし、天之忍穗耳命が再び天降りを命じられるわけだが、命令を拒むことによって邇邇芸命の降臨が決まるのである。天之忍穗耳命はつぎのような口実を言い出し、降臨を拒んでいる。

「僕は降らむと装束しつる間に、子生れ出でぬ。名は天邇岐志国迹岐志天津日高日子

10) 『古事記』「全集」p.77

11) 西宮一民校注(1980)『古事記』「新潮日本古典集成」新潮社、p.78

12) 天菩比神を遣はしつれば、乃ち大国主神に媚び附きて、三年に至るまで復奏さざりき。(『古事記』「全集」p.114)

「番能邇々芸命ぞ。此の子を降すべし」(p.127)

降臨する準備をしている最中に子供が生まれたので、生まれた子を降すべきと言っているのである。生まれたばかりの子を降すこともおかしいが、二度にわたる天之忍穗耳命の権利の抛棄からは不可解ささえ感じられる。ここで、邇邇芸命の母方の系譜をたどってみると、天照大御神と共に天孫降臨の神勅を下す高御産巢日神、つまり、高木神の娘を母親としていることがわかる。高木神は天地開闢の時、天御中主神・神皇産霊神と共に成り出た造化三神の一人で、高天原系神話の至上神である。すなわち、その分、邇邇芸命の血統は確固たるものになっているのである。須佐之男命と天照大御神のうけいの結果として生まれた天之忍穗耳命に統治権を委任するよりは、高天原系の至上神の神性が加わった邇邇芸命の方が支配者として最も相応しく、有力であろう。

ところで、『日本書紀』には、最初から葦原中国の統治権を天忍穗耳尊(天之忍穗耳命)にではなく、瓊瓊杵尊(邇邇芸命)に委任する内容が載っている。天忍穗耳尊は、物語において、ただ瓊瓊杵尊に血を分ける役割を果たして終わっているような存在になっている。しかも『日本書紀』では、瓊瓊杵尊が母親の高皇産霊尊(高木神)の娘によって生まれてくる内容も、降臨する直前ではなく、神代下の冒頭部に載せている。

天照大神の子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、高皇産霊尊の女たく幡千千姫を娶きたまひて、天津彦彦火瓊瓊杵尊を生れます。故、皇祖高皇産霊尊、特に、憐愛を鍾めて、崇て養したまふ。遂に皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊を立てて、葦原中国の主とせむと欲す。(p.110)

『日本書紀』の瓊瓊杵尊は葦原中国を平定する以前に生まれており、瓊瓊杵尊が生まれると、高皇産霊尊は自分の外孫の彼を特別に可愛がり、大事に育て、葦原中国の主としようとしているのである。『古事記』とは違い、天孫降臨に関して、天照大神よりむしろ高皇産霊尊の意思が大いに反映されていることがわかる。それは既に言及したように、素戔鳴尊とのうけいによって生まれた天忍穗耳尊より、高天原の至上神でもある高皇産霊尊自身の娘との間で生まれた瓊瓊杵尊の方に統治権を委任したかったためであろうか。

その上、『日本書紀』では、葦原中国の支配者だけではなく、征討者に関連しても、この高皇産霊尊の関与が目立っている。『古事記』では、葦原中国の統治権は天孫の天之忍穗耳命にあるという天照大御神の仰せから始まるが、征討のために誰を遣うかということでは、高木神と天照大御神との命令に、天の安河の河原に八百万の神が集まって対策を考え、適任者を決める内容になっている。

天照大御神の命以ちて、「葦原之千秋長五百秋之水穂国は、我が御子正勝々速日天忍穗耳命の知らず国ぞ」と言因さし賜ひて天請降したまひき。(中略)高御産巢日神・

天照大御神の命以ちて、天の安河の河原に八百万の神を神集へて、思金神に思はしめて詔りたまはく、云々(pp.113~114)

このように、『古事記』では、天照大御神の仰せから始まる葦原中国の統治権の委任の話が、以下の『日本書紀』では、多くの所伝が天照大神を抜きにして語り、征討者を定める場面においても、高皇産靈尊単独で事を進めていることがわかる。それは天穗日尊(天菩日命)だけではなく、二番目の天稚彦(天若日子)、次の武甕槌神(建御雷神)を遣わすときも同じである。

高皇産靈尊、八十諸神を召し集へて、(中略)高皇産靈尊、更に諸神を会へて、当に遣すべき者を問はせたまふ。(中略)高皇産靈尊、更に諸神を会へて、当に葦原中国に遣すべき者を選ぶ。(pp.110~116)

さらに、葦原中国を征討させるために、天稚彦に弓矢を下賜するのも高皇産靈尊である。また、高皇産靈尊が瓊瓊杵尊を天孫として降臨させようとしていることを、最後の征討者として遣わされた経津主神と、彼に添えて遣う武甕槌神が出雲の国の大己貴神(大国主神)に語る場面にも、「高皇産靈尊、皇孫を降しまつりて、此の地に君臨はむとす。(後略)」とあり、高皇産靈尊を頂点とする天孫降臨の神話が綴られているのである。天照大神の存在は薄い。

だが、『古事記』には、建御雷神に天鳥船神を添えて遣わしたとあり、出雲国で大国主神に、「天照大御神・高木神の命以ちて、問ひに使はせり。(後略)」と、天照大御神の名を先に言及していることから、天照大御神を中心にして平定が進められていることを語ろうとしていることがわかる。記紀で、天照大御神と高御産巢日神の間の力学関係に微妙な差異が生じている。

高御産巢日神は、天地が初めて分かれるとき、高天原に二番目に成り出た神で、高天原系神話の至上神でもあり、万物を生成する霊力をもった三柱の造化神の一神でもある。すなわち、高天原ではむしろ、竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原で生まれた天照大御神より正統性を有する神といえよう。その分『日本書紀』では、高天原系による葦原中国平定と天孫降臨を完全なものにするため、高木神を主軸にしているのではないだろうか。

いずれにせよ、このようにして天照大御神の第一子と高御産巢日神の娘の間で生まれる邇邇芸命の降臨が成り立つのである。ちなみに、「鑑賞」は三品彰英の論拠に注目し、天孫降臨の各所伝中もっとも原初的なものを『日本書紀』の本文とし、もっとも新しいものは『古事記』であると述べる。各所伝の比較検討によって神話が発展する過程と、皇祖神天照大御神の権威の高まることわかれるという<sup>13)</sup>。

13) 直木孝次郎・西宮一民編(1977)『日本書紀・風土記』「鑑賞日本古典文学」角川書店、pp.42~44

これまで見てきたように、葦原中国の征伐から国譲りを経て、天孫降臨に至る過程には、統治者となる者と征討者になる者の出自が明確に分かれていることがわかる。

#### 四、天孫に娶られる者

ところで、邇邇芸命の降臨してからの纏まった物語は存在するが、それは木花佐久夜毘売との結婚話が全部で、当初、高天原の神々の最大の目的の、降臨した天孫による統治というモチーフは薄れている。邇邇芸命による支配の様子は見られず、息子の火遠理命の生まれるところに焦点が置かれており、邇邇芸命が物語の中心になっているとは言いがたい。『日本書紀』には、木花開耶姫との一夜の性交渉で懐妊し、三人の子供が生まれてからしばらくして亡くなったとある<sup>14)</sup>。

火遠理命は高天原から降臨した邇邇芸命を父とし、大山津見神の娘の木花佐久夜毘売を母として生まれた神で、神代神話の中では生まれるまでの過程が最も詳細に記されている。韓国の神話が英雄の誕生の有り様を極めて強調しているのに対し、日本の神話からは、この木花佐久夜毘売による出産の話の他に、これといった誕生の話は確認されない<sup>15)</sup>。しかし、生まれてくる火遠理命は別格の神性を帯びているわけではない。火遠理命は天つ神と山つ神の娘との間で生まれた神で、平定した葦原中国を統合するプロセスの第一歩である。国譲りが済み、統治権を委ねられた者が征服された側の女性を娶ることで同化を図り、そのなかから新しい王者が生まれてくる。つまり、火遠理命なわけである。そして火遠理命による海洋勢力への接近が見られ、結局、諸種族を涉猟していく過程が露になっていく。

天孫として降臨する火遠理命の父親の邇邇芸命は、八尺の勾玉と鏡、そして草薙剣の三種の神宝を携えて降りて来る。降臨の前に派遣された建御雷神によって葦原中国は平定されており、地上における邇邇芸命の権力は絶対的なものはずである。しかし、面白いのは、彼の結婚相手は平定される前に葦原中国を支配していた大国主神の血筋の女性ではなく、笠紗の岬という所で出逢った大山津見神の娘ということである。須佐之男命から始まる大国主神の家系を権力から排除しようという意図が内在しているのであろうか。

大林太良は、邇邇芸命と木花佐久夜毘売とが出逢った場所が海浜であることに注目し、二人によって海と山の代表者の火照理命と火遠理命が生まれてくると述べている<sup>16)</sup>が、ここでの大山津見神とは、伊耶那岐と伊耶那美による国生みが終り、神生みをする

14) 凡て三子ます。久にありて天津彦彦火瓊瓊杵尊崩りましぬ。〈坂本太郎ほか校注(1994)『日本書紀(一)』巻二、神代下 第九段、岩波文庫、p.124〉

15) 関丙勳(2011)「神話に見る英雄の神性」『日本文化学報』48輯、pp.133~147

16) 大林太良(1996)『東と西 海と山-日本の文化領域-』第三章「海と山に生きる人々」小学館、pp.172~173

き、木の神の次に生まれた神で、山をつかさどるという意味で、普通名詞として用いられているらしい<sup>17)</sup>。その他、須佐之男命の肥の河の河上で出逢う櫛名田比売の老父の足名稚も大山津見神の子となっているが、大山津見神を国つ神としており、そこで須佐之男命によって退治される八俣の大蛇は鉄山、つまり、山を象徴するものとされる。すなわち、木花佐久夜毘売の父親の大山津見神は山の神とし、あえて国つ神との区別を図るためのものなのかもしれない。結局、高天原の天孫によって、下界が山→海→国の順序で、完全な形に統合されていく段階を示し出すためのものと取れなくもない。

以下は、竺紫の日向の高千穂の霊峰に降臨した邇邇芸命が木花佐久夜毘売に出逢う場面である。

是に天津日高日子番能邇邇芸命、笠紗の御前に麗しき美人に遇ひたまひき。爾に「誰が女ぞ」と問ひたまへば、答へて白さく、「大山津見神の女、名は神阿多都比売、亦の名は木花之佐久夜毘売ち謂ふ」とまをしき。(p.133)

「笠紗の御前」は現在の鹿児島県の野間半島とされるが、この地名については、邇邇芸命が日向の高千穂のくじふるだけに降臨して、その土地柄を説明するところに、

此地は韓国に向ひ、笠紗の御前に真来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。(p.130)

と、既に言及されている。韓国とは伽羅を指すもので、ここに登場する理由を、韓国との交通を意識してのものとされる<sup>18)</sup>ように、伽羅と笠紗の御前の何らかの関わりを秘めているような印象が濃い。何より韓国が意識されている点は注目に値する。周知のように、須佐之男命の子として生まれた大年神の系譜を語るところに、韓神・曾富理神・白日神などが見えている<sup>19)</sup>が、これらは韓半島系の神とされ、いわゆる高天原系による支配の以前から韓国の存在が意識されていたことを表すものである。

また、邇邇芸命の降臨する日向の高千穂の「くじふるたけ」は、韓国の『三国遺事』の『駕絡国記』に見える、伽羅の始祖首露王の降臨地の「亀旨峰」と類似するとの見解もある<sup>20)</sup>。その上、『風土記』『逸文』の日向国の国号の所以を記すところに、「『此の国の地形は直に扶桑に向かへり。日向と号くべし』とのりたまひき」とあり、扶桑が何処を指しているのかは不明だが、上の引用文と構造的に似ており、つづく日向国に

17) 『全集』では、「固有名詞というより普通名詞と解すべきもので、鹿児島県加世田市の山間部にある神社は、ほとんどこの神を祭っている」とする。pp.133～134

18) 『古事記』『全集』p.131の頭注

19) 『古事記』『全集』p.111

20) 上田正昭・井手至編(1978)『古事記』『鑑賞日本古典文学』角川書店、p.156

「韓槌生村(からのくしふのむら)」が見え<sup>21)</sup>、所在不明とはされるが、加羅の首露王降臨の亀旨峰に通ずるものがあると考えられる。

それはともかく、日向の高千穂の土地柄の良さを讃えるところにみられる「笠紗の御前」は、地理的に韓国からの入り口のような位置を占めており、そこに麗しき女性がいて、話では偶然に天孫とその美女が出逢う場所になっているが、実はそこは二人が巡り合うための必然の場所だったはずである<sup>22)</sup>。

さらに、邇邇芸命が木花之佐久夜毘売に出逢う話には、韓国の朱蒙神話で、東扶余の金蛙王が太伯山の南の優渤水で偶然に柳花という女に出逢う場面を想起させるものがある。

金蛙嗣位、於是時、得女子於太白山南優渤水、問之曰、我是河伯之女、名柳花、<sup>23)</sup>

金蛙が即位して間もないの頃であり、柳花との出逢いの様子が偶然のように記されているが、まさに邇邇芸命が神阿多都比売を笠紗の御前で出逢い、名前を聞く話と酷似している。また、この二人の女性は、一度だけの性交渉によって子を孕み、厚い土で固められた、日の差し込まない産屋と室とに籠もる話型になっている。しかも、生まれた子供が成長して、各々兄弟もしくは兄弟に等しい者たちに虐められ、親元を離れるようになり、後に統治者になる、という展開からは関連性さえ窺われる<sup>24)</sup>。もちろん、金蛙は天孫でもなく、柳花も河伯、つまり、河の神の娘で、しかも柳花の孕んでいるのも金蛙の子ではないので、両話の人物関係の違いは明確だが、構造上の類似性は否定できまい。

いずれにせよ、邇邇芸命は山つ神の娘の木花之佐久夜毘売から火遠理命を儲け、火遠理命と海の神の娘の豊玉毘売命との間で鵜草葺不合命が生まれ、神武天皇はこの鵜草葺不合命を父としているのである。つまり、邇邇芸命の山つ神の娘との結婚は、支配権の統合を語る重要な過程であり、山岳から海洋、葦原へと続く、完全な統合の第一

21) 秋本吉郎校注(1958)『風土記』「日本古典文学大系」岩波書店、pp.523~525

22) 類型の男女の出逢いの構造は、『古事記』雄略記で、天皇が吉野宮への行幸の時、吉野川の浜で出逢う美麗な乙女の話にも見られる。「天皇、吉野宮に幸行でまし時、吉野川の浜に童女有り。其の形姿美麗しかりき。故、是の童女に婚して宮に還り坐しき。」(『全集』p.321)ここでも王者の行幸が齎す女性との出逢いの場面が記されている。このような話型は平安時代の『伊勢物語』や『大和物語』などにも受容されているが、必ずしも行幸と出逢いが王権の行方や支配に直接的に関わるような内容になっているとは言えず、形だけの踏襲に止まっていることがわかる。

23) 李丙燾校勘(1977)『原文三国史記』卷十三、高句麗本紀 第一(始祖 東明聖王)、乙酉文化社、p.129

24) 天孫として降臨した邇邇芸命には、柳花と契りを結んでどこかへ行ってしまった自称天帝の子の解慕漱と、扶余王の解夫婁から王権を受け継ぐ金蛙の、二人のイメージが二重写しされているように思われる。朱蒙の話は火遠理命の話だけではなく、多方面から大国主神の話とも似通っているところが確認される。<関丙勳(2010)「韓国から見た出雲神話一大穴牟遲神話の特色」勉誠出版「アジア遊学」『出雲文化圏と東アジア』所収、p.18~26>

歩を意味するものと考えられる。

## 五、おわりにかえて

須佐之男命から大国主神、火遠理命へと続く、葦原中国における神話の主人公から共通に見られる特徴として、皆長子でないことが挙げられる。しかも彼らは、放浪者となったり迫害を受けたりするが、終局には力を蓄えて帰郷し、支配者となる。だが、それに反して、高天原では、葦原中国の統治者として執拗なまで「日嗣の御子」たる存在を意識しており、それは逆えない掟となっていることがわかる。太子の天忍穗耳命からその長子の邇邇芸命へと繋がる天孫降臨の記事がそれを裏付けている。天照大御神によって日嗣の御子とされる天之忍穗耳命が葦原中国の統治を命じられるが、天之忍穗耳命自らの辞退によって、その長子の邇邇芸命が降臨するようになる。

しかし、詳細をみると、高天原には天照大御神の他に至上神の高御産巢日神がおり、葦原中国の平定から降臨まで、この神が深く関与していることが見て取れる。ことに『日本書紀』では、征討に派遣される者から降臨する邇邇芸命に至るまで、すべて高皇産靈尊(高御産巢日神)が権限を握っているような書き振りになっている。それが何を意味するかといえば、邇邇芸命の血筋が、天照大御神と須佐之男命とのうけいの結果生れた天之忍穗耳命より、その天之忍穗耳命と高御産巢日神自身の娘との間で生れた邇邇芸命の方に正統性を置いていることを表すものである。また、須佐之男命とのうけいの過程で生れた第二子の天菩比神は征討者として派遣されるが、復命せず大国主神の方に付くことなどは、須佐之男命との関係が疑われるところである。そのため、降臨する邇邇芸命が妻に迎え入れるのも須佐之男命や大国主神とは関係の無い、大山津見神の娘の木花之佐久夜毘売なのであろう。

すなわち、高天原の神々の協議によって葦原中国の平定に遣わされる神の中には、天照大御神の第二子や、また、天照大御神の血筋を引かない者もいるが、統治権は必ず嫡子のもので、権力の座を横取りしようとした天若日子は高御産巢日神によって処刑され、野心の末路がいかなるものかを明確に示している。また天若日子には神や命という呼び名も付けていないことから、神性を剥奪し、死する人間同等の扱いをしていることが観察できる。揺るぎ無い嫡統支配の論理が邇邇芸命を天孫として降臨させる結果となり、初代王者として国を譲られる主人公になるのである。

しかし、いくら嫡統とはいえ、地上に降臨して女に逢い、その中から子どもが生れると、すぐ身を隠してしまうのである。しかも、長子でない火遠理命が統治権を取るなどから、高天原と葦原中国の異質さが浮彫りになる。無論、長子でないものが権力を取ることが地上

世界の常識とはいえない。ただ、権力というのは力のある方へと自然に移るようなものであることを示し、実際は長子でない者の反逆や謀反などの事態を、長子から迫害を受ける内容に置き換え、本郷を離れて流離う英雄の試練譚を設け、終には力を蓄えた弟が長子を服従させて、王座を掌握したことを正当化する話を作っているのである。また、そのような物語を作るためには規範に反する素材が必要となろう。しかも、長子でない者が統治者を転覆させて権力を掌握した場合、それ相当の大義名分が必要だったと思われる。歴史的に、天智天皇の死後、弟の大海人皇子が672年、謀反を起こし、当時の権力者の天智天皇の息子の大友皇子を打ち殺し、権力の座につくことによって『古事記』の編纂が企画されたことを念頭におけば、神話の制作にそれらしい構造が見られるのは不思議ではない。

そのほか、本論では、征討者として派遣される天若日子と建御雷神が賜れる剣や弓矢などの武器の暗示するものはなにか、比較検討した。

## 【参考資料】

- 萩原浅男校注・訳(1973)『古事記』 「日本古典文学全集」小学館
- 西宮一民校注(1980)『古事記』 「新潮日本古典集成」新潮社
- 坂本太郎ほか校注(1994)『日本書紀』(一)(二)岩波文庫
- 秋本吉郎校注(1958)『風土記』 「日本古典文学大系」岩波書店
- 李丙燾校勘(1977)『原文三国史記』 「高句麗本紀」乙酉文化社
- 李奎報・李承休著、朴斗抱訳(1974)『東国李相国集』 「東明王篇・帝王韻紀」乙酉文化社
- 片桐洋一校注・訳(1994)『竹取物語』 「新編日本古典文学全集」小学館
- 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳(1972)『源氏物語(二)』 「日本古典文学全集」小学館
- 原田敏明(1967)「古代宗教論」『岩波講座 日本歴史 古代2』所収、岩波書店、pp.296~297
- 立花文子(1973)「古事記上巻における『命』の意義」『古典論潮』創刊号、さわらびの会、pp.30~38
- 直木孝次郎・西宮一民編(1977)『日本書紀・風土記』 「鑑賞日本古典文学」角川書店、pp.42~44
- 上田正昭・井手至編(1978)『古事記』 「鑑賞日本古典文学」角川書店、p.156
- 益田勝実(1993)『火山列島の思想』筑摩書房、p.85
- 田村憲治筆(1994)「鳩」『古典文学動物誌』所収、「国文学解釈と教材の研究」学灯社、p.88
- 大林太良(1996)『東と西 海と山-日本の文化領域-』第三章、小学館、pp.172~173
- 関丙勳(2010)「韓国から見た出雲神話—大穴牟遲神話の特色」 「アジア遊学」『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版、p.18~26
- \_\_\_\_\_ (2011)「神話に見る英雄の神性」『日本文化学報』48輯、韓国日本文化学会、pp.133~147

## 要 旨

高天原から葦原中国の征討を命じられた者が次々と派遣され、国譲りを経て、邇邇芸命が降臨するまでの内容には、統治者を選ぶ過程に特色が見られ、征討の過程にも独特な物語が形成されていることがわかる。天照大御神と高御産巢日神によって、はじめに葦原中国統治を命じられたのは天之忍穗耳命だが、降臨するのは邇邇芸命である。また、葦原中国の平定は三人目の建御雷神によって果たされるが、その前に派遣される天若日子の話は、神の死する場面と葬儀に関連した興味深い物語を成している。

天之忍穗耳命は二度に亘って葦原中国への降臨を拒んでおり、天若日子は反逆の疑いで処刑される身となるのだが、そこには至上神の高御産巢日神が深く関わっていることがわかる。ことに、天若日子が死を招く経緯と葬儀の様子は異彩を放っており、神話は天若日子に神や命の呼称さえ付与していないことが確認される。その他、天若日子と建御雷神を象徴する武器も、弓と剣とで、異なっていることがわかる。

以上のように、本稿では、邇邇芸命が降臨する前後の記事を中心に、統治権を委任される者と、平定に遣わされる者の出自などを含め、平定と降臨の様相について検討を加えてみた。邇邇芸命が降臨する前から高天原では葦原中国の統治をめぐる議論が繰り広げられており、征討者の派遣と平定の過程における出来事など、他では見られない特色が見受けられる。比較研究の立場から、随所に韓国の神話を用いて比較検討を試みた。

キーワード：征討者、統治者、天之忍穗耳命、邇邇芸命、天若日子、高御産巢日神

투 고 : 2013. 8. 31  
1차 심사 : 2013. 9. 14  
2차 심사 : 2013. 10. 5